
ピエロの仮面

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピエロの仮面

【Nコード】

N8788H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

街にやって来たピエロ。男の子達はそのピエロをしているおじさんとお話をしているうちにふと興味を持って壁にかけてあったピエロの仮面を被ってみたが。仮面には恐ろしい魔力が備わっている場合があると言われています。

第一章

ピエロの仮面

今日街にピエロが来ていた。楽しげに踊りながら子供達にあるものを配っていた。

「うわっ、サーカスが来るんだ」

「何か久し振りだよな」

「はいはい、楽しみにしててね」

顔を真っ白に塗りたくり赤い鼻にして目は黒く縁取りしている。

そして赤と白、それに緑のやたらと派手な服と帽子を身に着けておどけた踊りをしながら歩いている。その彼が子供達に対してそれぞれチラシを配ってそのうえで話していた。

「今夜だよ、今夜」

「今夜なの？」

「サーカスは今夜なの」

「そうだよ。火の輪くぐりに空中ブランコ」

サーカスの定番である。

「それにナイフ投げ。何でもあるよ」

「よし、じゃあパパとママに御願いして」

「絶対に行くわ」

「うん、皆来てね」

ピエロはまた彼等に告げるのだった。

「そして楽しんでね」

こうしてピエロが子供達をサーカスに誘う。街の体育館に設けられたサーカスは本当に何でもあり火の輪くぐりもあれば空中ブランコもある。そしてナイフ投げもあのピエロの踊りもあった。子供達は観客席で歓声を送り心から楽しんだ。その日は誰もが楽しい時間を過ごすことができたのだった。

その翌日だった。昼のことである。体育館に一人の男の子がやっ

て来た。彼を出迎えたのは一人の小柄な中年の男だった。上下共黒いジャージ姿だ。

「あれ、僕どうしたの？」

「ピエロさんいますか？」

男の子はにこりと笑っておじさんに尋ねてきた。見れば黒い髪を丁寧に切って少し吊り目の顔をしている。服は青い上着に半ズボンである。細い身体をしていて髪は黒く短く刈っている。目は少し垂れていてやたらと人なつつこそうな顔立ちをしている。

「いたら御会いたいんですけど」

「ピエロって昨日の？」

「はい、そうです」

男の子はにこりとしたままおじさんに答える。

「いますよね。このサーカスにまだ」

「うん、いるよ」

おじさんは男の子に対して明るく答えた。

「だってね。サーカスはまだはじまったばかりじゃない」

「だからおられるんですね」

「そうだよ。サーカスはこの一週間やるからね」

それだけの契約期間ということだ。

「その間はずっとこの街にいるからね」

「それでピエロのおじさんは」

男の子はまたおじさんに尋ねるのだった。

「何処におられるんですか？」

「そのおじさんだよね」

「はい、何処に」

「ここにいるよ」

おじさんはにこりと笑って男の子に対して答えるのだった。

「ここにね。いるよ」

「この体育館にですよね」

「うん、それもね」

そのにこりとした笑みをさらに深いものにさせてまた男の子に対して言ってきた。

「今この場所にね」

「この場所ですか？」

「そうだよ、君の目の前にね」

そしてこう言うのだった。

「いるよ」

「えっ、いないですよ」

けれど男の子はおじさんの言葉を聞いてきよとんとした顔になるだけだった。

「ピエロなんて何処にも」

「いや、それがいるんだよ」

けれどおじさんはにこりと笑ったまま男の子に語る。

「今ここにね」

「けれどいつのはおじさんだけだし」

「そのおじさんがなんだよ」

おじさんはここでこう言うのだった。

「おじさんがね。ピエロなんだよ」

「えっ!？」

男の子はその言葉を聞いてまずは目をしばたかせてしまった。

「おじさんがピエロなんですか？」

「信じられないかな」

「だって。顔も服も」

「ははは、あれはね」

おじさんはなおも笑って男の子に対して話す。

「まあここで話すのも何だし。中に入るかい？」

「いいんですか？」

「いいよ、今は時間があるしね」

そのにこやかな満面の笑顔で男の子に告げる。

第二章

「中に入ってお茶とお菓子でも食べながら楽しくお話ししよう」

「はい、それじゃあ」

こうして男の子はおじさんに案内されて体育館の中に入った。いつもは見慣れている体育館も今はまるで違っていた。外からは動物の鳴き声が聞こえ中は昨日見たサーカスの装飾があちこちにある。様々な花や紙で飾られそれだけを見ても実に眩い。その中を進んで一旦体育館の外に出て。そうして駐車場に並んでいるキャンピングカーの一つに案内されたのであった。

車の中はそのまま家だった。テレビもあれば様々な衣装も置かれている。それにテーブルや椅子もちゃんとありその上にはコップやお皿もある。席は車にそのまま備え付けられている形になっていた。男の子はまずその席の一つを指し示してもらったのだった。

「じゃあそこに座ってね」

「この席にですね」

「そうだよ。ええと、お菓子は」

車の横の方にある木の棚を開けてそこから何かを出そうとしていた。

「何がいいかな」

「別にいらないうすけれど」

「ははは、それは言ったらいけない言葉だよ」

おじさんは男の子の今の言葉は笑って遮ってしまった。

「それはね。子供は言ったら駄目だよ」

「そうですね」

「子供はお菓子を食べるものだよ」

そして今度は男の子にこう告げるのだった。

「お菓子をね。だからね」

「食べていいんですか」

「そういうこと。それで何がいいかな」
「ええと。だったら」
「クッキーなんてどうかな」
男の子が考えているところで言うてきたのだった。
「クッキー。好きかな」
「はい、大好きです」
男の子はクッキーと聞いてその顔をすぐに明るくさせた。
「クッキーあるんですか」
「チョコレートクッキーとレーズンが入ったクッキーがね」
しかも修理は一つではなかった。
「どっちもあるよ」
「どっちもですか」
「さあ、君はどっちがいいかな？」
ピエロそのままの口調で男の子に話してきた。
「チョコレートかクッキーかどちらが」
「そう言われると」
「好きなのを選んでいいんだよ」
男の子が迷っているのを見てあえてといった感じの言葉であった。
「どっちでもね」
「それでしたら」
男の子は暫く俯いた。そうしてそのうえで彼に答えるのだった。
「チョコレートを」
「それでいいんだね」
「はい、チョコレートを御願います」
男の子はまた言うのだった。
「そっちを」
「わかったよ。じゃあ僕もチョコレートにするよ」
「おじさんもですか」
「一人が違うものを食べるわけにはいかないだろうっ？」
またピエロの口調になっての言葉だった。

「だからだよ。ここはね」

「わかりました。それじゃあ」

「それで飲み物は紅茶をね」

言っている側から早速その紅茶を入れるのだった。そのかぐわしい甘ささえ含んだその香りが車の中を支配していく。男の子はその中で運ばれてくるその紅茶とクッキーを見ていた。そうしてその中でまた言うのだった。

「それでおじさん」

「何かな」

「ピエロですけど」

テーブルの上に紅茶とクッキーが置かれた。ピエロのおじさんは二人に向かい合う形で座った。こうしてようやく本格的な話になるのであった。

「あれってどうやってなるんですか？」

「最初はね。仮面を被っていたんだよ」

「仮面をですか」

「うちのサーカスじゃ最初そうだったんだ」

こう男の子に話すのだった。

「最初はね。けれどそれは止めたんだよ」

「どうしてですか」

「色々あってね」

目が動いたがそれでも語りはしなかった。

第三章

「それでなんだ。しなくなっただよ」

「そうだったんですか」

「悪いけれど理由は言えないんだ」

それについては言おうとはしない。しかしそれでも男の子はこれで何も言わなかった。だが目をしきりに動かしているところを見ると納得はしていないのはわかる。

「それはね」

「じゃあいいです」

納得はしていなくとも我慢する男の子だった。

「それで」

「悪いね。それでだけれど」

「はい」

「今はお化粧をしてピエロになるんだ」

「お化粧をですか」

「ほら、昨日の僕の顔は見たよね」

少し楽しそうに笑って男の子に継げてきた。

「昨日の僕は。あのピエロの顔は」

「白く塗ってお鼻を赤くした」

「それだよ。あれはお化粧なんだよ」

「そうだったんですか」

「ははは、そうは見えなかったらろう？」

ここでまた楽しそうに笑って男の子に対して話すのだった。

「あの時は。まるで仮面みたいに見えたたらう？」

「はい、それはもう」

男の子は真顔で答えた。答えながらお皿の上に出されたそのクッキーを手取る。そうしてそれを口の中に入れてその甘さを楽しむのだった。

「本当にそんなふうに」
「僕は必死に勉強してそこまでお化粧が上手くなったんだよ」
「こう男の子に話すのだった。」
「ピエロの身体の動きと一緒にね」
「ピエロの動きもですか」
「そうだよ。ピエロになるのも勉強しないといけないんだ」
「勉強ですか」
「ああ、勿論学校の勉強とは違うよ」
「男の子が何を考えているのかを見越してまた言うのだった。」
「それとはね。また違うから」
「また別の勉強なんですか」
「そういうことだよ。そしてその勉強をしてね」
「ピエロになったんですか」
「そういうことなんだ。いいかい？」
「ピエロの声がここで優しいがそこに何か深いものをたたえたものになった。」
「はい」
「ピエロになるのにでも何でも努力が必要だけれど」
「はい」
「すぐになろうとしたら後で大変なことになる場合があるんだよ」
「大変なことにですか」
「その通りなんだ」
「こう言ってまた男の子に話すのだった。」
「このことはよく覚えておいて欲しいんだ」
「よくですか」
「そう、よくね」
「おじさんの声はさらに深いものになっていた。」
「ピエロになれるのは誰でもなれるけれどね、すぐにはなれないんだ」
「すぐにはですか」
「君はピエロになりたいのかな」

「はい」

男の子の今度の返事はしつかりとしたものだった。

「そうです、なりたいです」

「なりたいんだっいたらこの言葉はよく覚えておいてね」

おじさんの言葉は強いものにもなった。

「それでいいね」

「はあ。そうなんですか」

これでピエロの話は終わった。二人はそれから暫くおじさんのリ
ードのままとりとめもない話をしていた。しかしその途中で。車の
外の方からおじさんと呼ぶ声がしてきた。

「和田さーーん、そこですか？」

「あれっ、僕のことだ」

男の子はここでおじさんの名前をはじめて知ったのだった。

「何か用かな」

「座長さんが御呼びですよ」

今度はこう声が聞こえてきた。

「是非。いらして下さいって言ってますよ」

「そうか。じゃあ」

立ち上がってそのうえで男の子に対して声をかけてきた。

第四章

「ちょっと席を外すからね」

「あつ、じゃあ僕はこれで」

「いや、すぐに終わるから」

男の子に対して微笑んで言ってきた言葉だった。

「そこでクッキーを食べていて。いいね」

「はい」

おじさんは車の外に出た。それで男の子は一人になった。

暫くは一人で静かにクッキーを食べてお茶を飲んでいた。ところがふと車の中に。あるものを見つけてそれに目を止めたのであった。
「あれって」

見ればそれは仮面であった。しかも普通の仮面ではない。

ピエロの仮面だ。それもかなり見事で精巧な。その仮面を見たのである。

「そういえばおじさんは」

「ここで男の子は思うのだった。」

「仮面を着ければとか言ってたっけ」

おじさんの言葉を生半可に覚えていたのだった。

「そうすればピエロになれたんだっけ」

こつこつに覚えていた。そうしてあまり何も考えずにピエロの仮面の方に向かいそれを手に取って。その仮面を着けてみたのだった。

そのうえで身体を動かしてみる。すると。その動きは男の子が自覚している自分のものではなかった。

速いのだ。しかも尋常ではない。おまけに身軽だ。そう、まるでピエロのようじ。

「うわっ、こりゃいいや」

側転やバク転を車の中でしてみても言葉だキャンピングカーの中

だからこそできることだった。

「こんな簡単に動けるんだ。それになれるんだ」
そしてこう言うのだった。

「こんなに簡単に。ピエロって」
思わず有頂天になってしまった。あちこちをひよいひよいと動く。
動きながらこうも思うのだった。

「けれどおじさんはどうして」
あのピエロのおじさんのことをだ。

「このお面付けないんだろう。そういえば何か言っていたけれど」
この辺りはよく覚えていなかった。それで動き続ける。しかし暫くして疲れたのでこれで止めようと思った。それで仮面を外そうとしたその時だった。

「えっ!？」
男の子の動きが仮面を着けてからはじめて止まった。

「取れない。何でなの!？」
何と仮面が取れないのだ。全く。

幾ら引き剥がそうとしても取れない。まるでそれが顔になったかのように。取れないのだ。幾ら引き剥がそうとしても取れず男の子は慌てた。

「何で!?! どうして!?!」
幾らやっても剥がれない。そうしてそのまま悪戦苦闘していると。ここで車の扉が開いた。

「お待たせ」
あのおじさんの声だった。

「用事は終わったから。待ったかな」
「おじさん、これ何なの!?!」

男の子はおじさんが帰ってきたのを見て思わず問うた。

「このお面。取れないけれど」
「えっ、まさかその仮面は」

おじさんは男の子を見て驚いた声をあげた。

「その仮面を着けたの！？まさか」

「御免なさい、つい」

「いや、謝るのは後でいいから」

おじさんは驚いていたがそれでも冷静だった。

「早くそれを取らないと」

「けれど取れないよ」

男の子は必死に取ろうとし続けていた。しかしそれでもだった。

どうしても剥がれない。そして何故かここで身体が自然に動き出していた。足が左右にびよこびよこと動き踊りだす。ピエロの踊りだった。

「それに身体だって」

「うん、わかってるよ」

しかしおじさんは冷静に男の子にまた返した。

「わかっているから。落ち着いて」

「このお面取れるの？」

「取れるよ。だから落ち着いて」

何度も落ち着くように言うおじさんだった。

「今はね。いいね」

「わかりました。それじゃあ」

こう言われて何とか心は落ち着いた。身体が動いたままだったが、おじさんはその間に柵の方に行きそこから何かを出してきた。見ればそれは。

「お札？」

「うん、そうだよ」

こう男の子に答えるのだった。

「これを仮面に貼ればいいからね」

「それでお面が外れるんですか？」

「うん、そうだよ」

おじさんは落ち着いたままだった、そのお札を持って踊り続けている男の子に近付きそうして。その仮面の額にお札を貼り付けたの

だった。

するとそれで仮面は外れそこから男の子の顔が出て来た。男の子はとりあえずほっとした顔になっていた。

第五章

「よかった、外れました」

「本当だよ、外れてよかったよ」

男の子だけでなくおじさんもまたほつとした言葉を出していた。

「この仮面はね。一度着けたらお札を貼らないと動きが止まらなくなるんだ」

「そうだったんですか」

「それに外れなくなるしね」

このことは男の子は今よくわかった。

「だからね。僕は絶対に着けないんだよ」

「呪いか何かがかかっているんですか？」

「うん、実はそうなんだ」

難しい顔をして男の子にまた述べた。

「実はね、もう何百年も前にできた仮面で」

「何百年ですか」

「確かイタリアのマントヴァの方だったかな」

首を傾げながらイタリアのある街の名前を出した。

「そこで作られたらしいんだ。せむしの道化師が着けていてね」

「せむしって何ですか？」

これは男の子の知らない言葉だった。目をしばたかせてそれが何か尋ねてきている。

「それって何ですか？」

「ああ、最近の子は知らないんだ」

おじさんは男の子の少しきよんとした言葉に顔を向けたのだった。

「せむしって何なのか」

「それでなになんですか？本当に」

「背中がね、丸くなって出ている人のことなんだよ」

「それをせむしって言うんですか」

「そうなんだ。まあ今は使わない言葉だけれど」

だから今の子供はノートルダムのせむし男と言われてもわからないのである。

「昔はそうした言葉もあつたんだよ」

「そうだったんですか」

「そうなんだ。その人はね、一人娘を失つてとても嘆き悲しんだ人で」

おじさんはそのせむしの道化師のことも語るのだった。

「その呪いが乗り移つた仮面らしいんだ」

「この仮面がですか」

「そう。だから着けたら誰でもすぐに道化師になれるけれど」

「お札じゃないと外れないんですね」

「そうなんだ。だから僕は絶対に着けないんだ」

おじさんは強張つた顔で男の子に答えた。

「絶対にね」

「それがこの仮面なんですか」

「普段はお札を貼つてるんだけど」

おじさんの言葉がここで残念そうなものになった。

「外れてしまつたんだね。それで君は」

「すいません」

「いや、謝らなくていいよ」

先程の話に戻つたがそれはいいというのだ。

「それはね。いいから」

「そうなんですか」

「確かにあの仮面は呪いはあるけれど」

このことを言つてからだつた。

「それでもね。お札でそれは取れるものだし」

「それでも何かあるんですね」

「さっき言つたけれど。ピエロはすぐになつちやいけないものなん

だ

おじさんが言いたいことはこれだったのだ。

「すぐにはね。なっちゃんいけなないものなんだよ」

「それはどうしてなんですか？」

「何でもそうだけれど努力してなるものだからなんだ」

だからだというのである。

「だからね。あの仮面は被ったら駄目なんだよ」

「それですか」

「うん、ピエロになるには毎日毎日練習して」

おじさんは真面目な顔で男の子に語る。

「そのうえでなるものだからね」

「だからあのお面は」

「そう、だからこそ着けちゃいけないんだ」

呪いがある以前にということだった。

「ピエロになる為にはね」

「そしてピエロになる為には」

「僕はね、今でも毎日練習しているんだ」

おじさんはここでこう語るのだった。

「毎日ね。そうしてピエロになっているんだよ」

「あの動きもお化粧もですね」

「それでいいかな」

優しい声になって男の子に尋ねてきた。

「それで。毎日練習してそれでピエロになりたい？」

「はい」

男の子はあらためて頷いたのだった。

「まだよくわからないですけどけれどそれでも」

「そう、それでいいんだよ」

おじさんは男の子の言葉に満面の笑顔になった。温厚な顔がさらに穏やかなものになっていた。

「それでいいんだよ。それじゃあね」

「それじゃあ？」

「僕はもうちょっとしたらこの街を後にするけれど人を紹介してあげるから」

「こう言うのであった。」

「その人に教わって。そして素晴らしいピエロになってね」

「毎日練習してですね」

「そう、毎日ね」

優しい微笑みと共の言葉だった。

「頼むよ。いいね」

「わかりました」

男の子は強く誓うのだった。本当に毎日練習してそうしてピエロになることに。何かになる為には毎日努力をしなくてはいけない、それが男の子にもわかった、その時にわかったのだった。

ピエロの仮面 完

2009・6・5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8788h/>

ピエロの仮面

2010年10月8日15時56分発行